Osaka University Knowledge Archive

Title	法隆寺金堂・山中羅漢壁画の復元に関する研究
Author(s)	松田, 真平
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 152-153
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53266
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

法隆寺金堂・山中羅漢壁画の復元に関する研究

松田真平／㈱ICD 現代デザイン研究所

法隆寺金堂内部の初層18面の枓間壁に描かれていた山中羅漢図の全貌については，あまり多くが紹介されていない。筆者は，諸資料を丹念に集めることで，ある程度その火災焼失前の全体像を推定できるのではないかと考えた。今回の発表では，１号壁上部の当壁画の復元イメージの展示と35点のスライド（パワーポイント）の映写により，「それぞれの壁の昭和24年の羅災以前の写真」「大陸からの図柄伝来のルーツ」「壁画のモチーフとされる法隆寺周辺の実際の山の形」等の検証を行い，できる限り多くの情報を集積させることに努めた。ここでは簡単にその内容の要点を，いくつか記しておきたい。

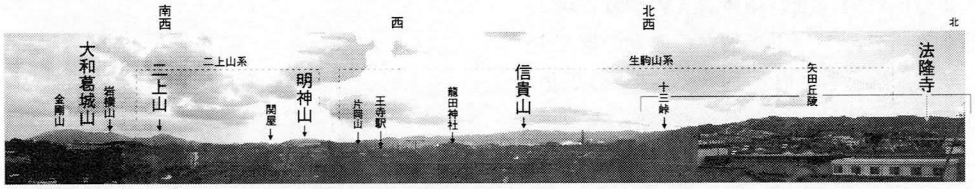
１号壁上「山中羅漢図」の復元イメージ（部分）

●**７号壁（聖観音）上の羅漢壁画の背景に描かれていた山の形**は，法隆寺付近から西方に見える信貴山の形と同じであることが，現地付近をJR王寺駅付近から実際に歩いてみることにより，確認できた。

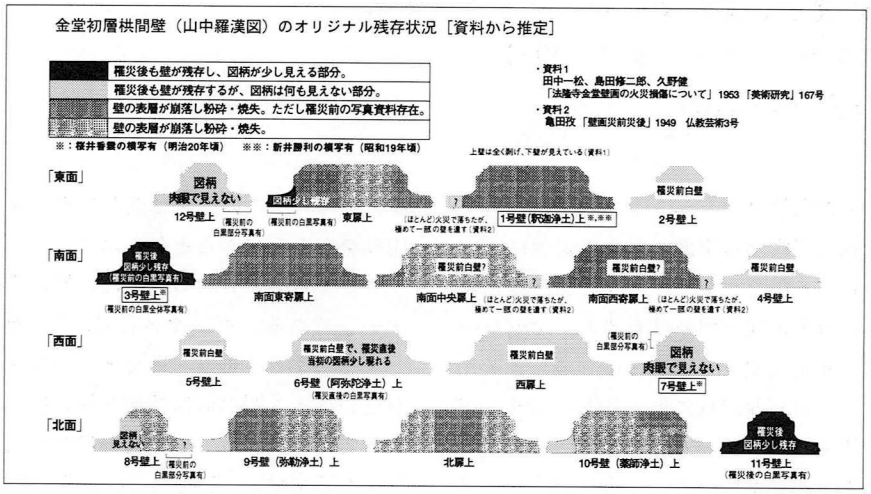
●**１号壁（釈迦浄土）上の，横長の壁画左右背景に描かれていた山の形**は，右側が法隆寺付近から西方に見える二上山の形であり，左側が大和葛城山から岩橋山付近とほぼ同じ形である。二上山は，雄岳と雌岳の二つの山頂が横に並ぶ形をした山であるが，法隆寺付近では雌岳は雄岳の背後に隠れて全く見えないため，実際に描かれていたものも，この雄岳のみの形になっている。これも，筆者が現地付近を実際に歩き，飛鳥付近から北上したりして，二上山の形の変化を観察することで，確信を得たものである。

なお，壁画では山の山麓部が岩窟風の表現で描かれているが，これは，神仙を描く際の一定のマニュアル（粉本）に従ったためであろう。

１号壁の左右対称の位置には，有名な６号壁（阿弥陀浄土）があり，現実に二上山や大和葛城山の風景が見えるのは，この方角であるため，ここの上部の枓間壁で，二上山と大和葛城山の構図が最初に構想されたと考えら



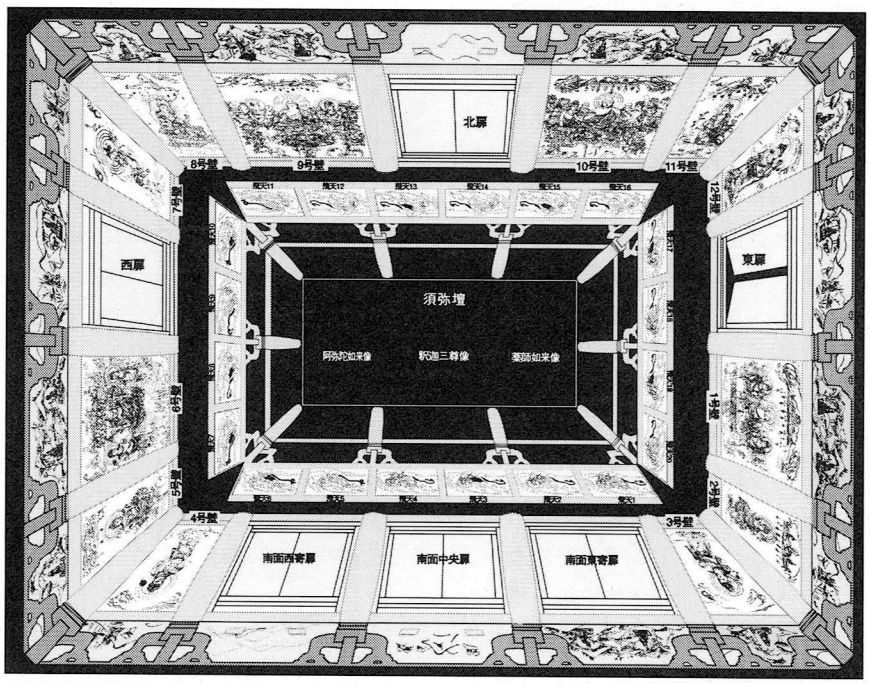
JR法隆寺駅付近から見る西側の山並み：（壁画「山中羅漢図」の中に，これらの山の形が使用されている）



れる。これは，単なる想像ではなく，火災直後の6号壁上部の写真でも，元の絵の輪郭の一部が見えている。

●**1号壁（釈迦浄土）上の羅漢（正しくは比丘［びく］）の指先の表現やルーツ**については，本誌の「ポスター発表」の説明部分を参照の事。

●**東扉と西扉の上部柵間壁**は，その方角と左右の壁画との関連性，東扉上の壁面の火災前の部分遠景写真の痕跡などから，法隆寺の南西にある「明神山」（奈良県王寺町）が背景に描かれていた可能性が大きい。



金堂壁画50面創建時のトータルコーディネート：7号壁上部に信貴山の形，東扉・西扉上に明神山の形，1号・6号壁上に二上山・大和葛城山の形があったものと推定される。